

IGS理事会報告

## 2022 年第 1 回理事会報告

京都大学大学院地球環境学堂 勝見 武  
 防衛大学校システム工学群 宮田 喜壽

### 1. はじめに

国際ジオシンセティックス学会（IGS）における 2022 年第 1 回理事会が、令和 4 年 4 月 1 日～4 月 7 日、オンラインで開催された。スケジュールは以下の表に示すとおり。各会議の参加者は、事務局を含め 20～30 名だった。

会議の種類	日時（日本時間）
全体会議（開会）	4 月 1 日 21:00-23:00
持続可能性、電子図書館および出版、教育に関する各委員会報告	4 月 4 日 21:00-22:30
技術委員会（補強、排水、遮水、安定化）に関する報告	4 月 5 日 06:00-07:30
若手会員、コミュニケーション、コーポレートに関する各委員会報告	4 月 5 日 21:00-22:30
地域活動（アジア、アフリカ、米国、欧州）に関する委員会報告	4 月 6 日 21:00-22:30
全体会議（閉会）	4 月 7 日 21:00-23:00

### 2. 全体会議

全体会議でなされた報告および決定事項で主要なものは以下のとおりである。

- ・ユ（Yoo, 韓国）会長のもとでの活動計画として掲げられている 5 つの柱：Ⅰ. 技術委員会の強化と活動の活性化、Ⅱ. 最新のコミュニケーション・ツールによる教育と知識共有、Ⅲ. 持続可能な開発や地球規模の課題解決に対するジオシンセティックスの有用性の強調、Ⅳ. 会員の交流促進、Ⅴ. 若手会員の増強についての活動が、概ね予定通り進められていることが報告された。
- ・経理担当理事から、2022 年も財政は健全の見込みであることが報告された。
- ・IGS ロゴの刷新と使用に関するルール整備について検討が始められたことが報告された。
- ・2022 年 4 月～6 月に会長、副会長、理事の選挙を行うことが報告された。
- ・2026 年の国際ジオシンセティックス会議の開催地決定について、立候補した三都市の中からブレゼンがなされ、投票の結果カナダのモントリオールが選出された。北米支部が実行委員会を務め、2026 年 9 月にモントリオール国際会議場で開催予定。会議のテーマは Legacy（遺産）、Evolution（進化）& Revolution（変革）とのこと。

### 3. 各委員会の活動報告と今後の活動計画

- ・持続可能性：トゥーゼ氏（Touze、仏）に代わり、ケンダール氏（Kendall、豪）とラムジー氏（Ramsey、米）が共同委員長に就任することが承認された。プラスチックに関する国際規制への対応などの活動が報告された。
- ・IGS デジタルライブラリータスクフォース：ホームページにおけるデジタルライブラリーの更

新や、学位論文のデータベースへのリンク集の作成を行ってきたが、そのタスクは教育委員会が行うことになり、このタスクフォースは終了することになった。

- ・出版委員会：IGSの冠が付く発表や文章公開について活動を行っているが、審査期間をより短くすることや、トレーニングコースの充実化についての活動計画が示された。
- ・教育委員会（勝見が委員長）：発表やオープンアクセスポリシーの整備、リーフレットの翻訳、スペックガイド、用語の翻訳などの活動が報告された。デジタルライブラリーのコンテンツ刷新などの活動計画が示され、テレビなど新しい媒体での展開の可能性について意見交換がなされた。
- ・遮水技術委員会：教育用リーフレットやビデオの作成、オンライン講習会についての活動が報告された。新型コロナウイルスの世界的大流行がある程度終息して、行事が対面式に移行した後、現在進めているオンライン講習会を維持するののかについて意見交換がなされた。
- ・補強技術委員会（宮田が副委員長）：3つの地域会議での特別セッションの準備、2023年に北米でワークショップを開催することを検討中であることなどが報告された。地すべりに関する国際コンソーシアムとの協働について意見交換がなされた。
- ・水理技術委員会と安定化委員会からは報告がなかった。安定化委員会は用語の定義などで活動がスムーズになされていないということで、前会長のジョーンズ氏（Jones、英）が暫定委員長に就任し、組織のテコ入れを始めている。
- ・若手会員委員会：ジョブシャドウイング（社会人に半日か1日“シャドウ：影”のように同行し、彼らがどのような仕事をしているかを観察して学ぶ取り組み）の実現化などの活動成果が報告された。体制が十分でない支部での若手会員支援について意見交換がなされた。
- ・コミュニケーション委員会：ホームページ、ソーシャルメディア、メールマガジンを組み合わせた活動が報告された。IGSロゴを整備して、学会のブランディングをより効果的に行う環境づくりについて意見交換がなされた。
- ・コーポレート委員会：コーポレート会員相互の連携をより密にする必要性が示され、地域会議でのイベントの新設などについて意見交換がなされた。
- ・各地域委員会：新型コロナウイルスの世界的大流行のなかで、地域会議の開催準備が進められていることが報告された。会員数の増加を視野に行われている活動の多言語化、他学協会との協動的な活動状況について意見交換がなされた。

#### 4. 委員会活動を通して得られた教訓，問題点，戦略目標について

今回の理事会では、各委員会には標記の内容について報告することが求められていた。日本支部の活動に有益なので、主要な内容を以下に列挙する。

- ・委員会メンバー、委員会間、支部間の効率的なコミュニケーションが重要。
- ・特定の業務に関する手順やルールについて、随時調整・変更していくことが必要。
- ・学会活動の部分的アウトソーシングの在り方。
- ・メンバーの参加率を高める仕組みづくりが必要。
- ・イベントの運営／実施には、デジタルコミュニケーションツールが欠かせない。
- ・会員（個人・法人）の維持にもっと力を入れるべき。
- ・マイクロプラスチックの問題に対処するための戦略的アプローチを進化させることが必要。

- ・持続可能な建設資材としてのジオシンセティックスに関する認知度の高めることが重要。
- ・持続可能性委員会－各技術委員会間の交流を強固なものとし、その成果を会員で共有する。
- ・法人会員にスポットライトを当て、その活動を称える仕組みを構築する。
- ・持続可能性に関する研修や教育プログラムをさらに開発する。
- ・若手会員の関与を高める方法を開発する。
- ・政策立案者を含む外部組織との交流を深め、IGS の認知度を向上させる。

## 5. 本会議後のスケジュール

ご承知の通り 6 月 18 日締切りで新役員選挙が行われ、会長には Sam Allen 氏（米）が、副会長にはザノーニ氏（Zannoni, 南ア）が選出された。また、新任理事 8 名のうち日本からは久保幹男氏が選ばれている。この選挙結果を受けて 7 月 5 日には旧メンバーと新メンバーによるオンライン会議がそれぞれ行われた。さらに 9 月ワルシャワで開催されるヨーロッパ地域会議にあわせて総会と理事会が開催され、新体制が正式に始動することとなる。

## 6. おわりに

筆者のうち勝見は今回で理事の任期が終了します。一期目は桑野二郎先生や古関潤一先生の後ろについているだけで、貢献した実感はないまま 4 年が過ぎました。二期目は教育委員会の委員長を担当しました。この委員会は本誌で何度か紹介したように、リーフレット、EtE プログラム（Educate-to-Educator Program）、用語翻訳、仕様解説など実に多様な資料・プログラム提供を行っています。対象も、土木/地盤技術者はもとより、地盤工学の大学教員、行政担当者、一般市民など幅広く、よりよい社会基盤の構築を目指してジオシンセティックスを世の中に正しく普及するための活動を行っています。多くのメンバーは欧州と北南米から参画していて、さらにオセアニアやアフリカも加えると英語やスペイン語などいわゆる欧州語による情報の浸透力を感じます。国際と国内の活動がボーダレスと言ってもいいかもしれません。翻ってアジア地域は言語によるのか風習によるのか、情報の伝達にワンクッションあるように感じてきました。そのようなモヤモヤをもちながら、委員会が担当する技術資料・プログラムの多さと委員の考えの多様さに対して、私自身は十分なパフォーマンスを発揮できなかったと反省しています。特に最後の 2 年はコロナ禍のもとで活動が全てメールとオンラインとなりましたが、対面では可能な「ちょっとした質問」や雑談が難しくなりました。メールでは伝える内容がどうしても直截的になり、その結果きついやりとりを傍観することも何度かありましたが、対面であればもう少しマイルドにまとまっていたのであろうと思います。オンラインで効率的に会議は招集され、手続き上も物事を前に進められるものの、「目指すものは何か」の議論や「意外性」に出会い「新しいもの」をつくったりのドキドキする機会は欠けていたように感じています。私のようにコロナ前から理事の方々とつきあっている分にはまだいいですが、コロナ禍開始とともにメンバーに加わった宮田理事やこれから加わる久保新理事は、画面越しから理事会への参画が始まるわけで、大変なご苦労だと思います。ポストコロナで、フェーストゥーフェースで意見交換できるようになることを心より願っています。末尾ながら 8 年間サポートいただいた日本支部の皆様に感謝申し上げます。